

増える未熟児網膜症

やまなし

医療最前線

県立中央病院から

《 27 》

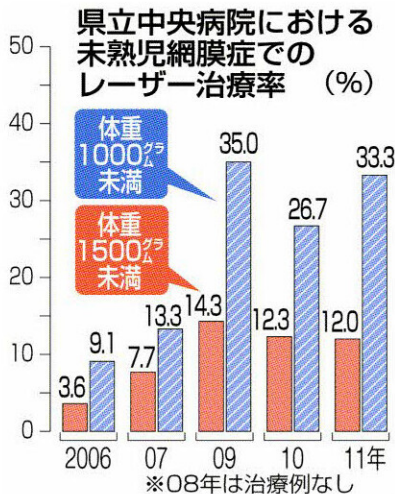
周産期医療の進歩によって未熟児の生存率が高まる中、未熟児網膜症を発症する子どもが増えている。県立中央病院の新生児集中治療室（NICU）に入院する子どものうち、未熟児網膜症患者の割合は2011年に14・2％で、06年（7・8％）と比べ倍増した。進行度に応じて必要なレーザー治療を受ける割合も増加していて、体重が小さい子どもほど高くなっている。

網膜は眼球をカメラに例えるとフィルムにあたる部分で、未熟児網膜症は早産や低出生体重によって、その網膜が発達するために起こる病



阿部 圭哲 眼科 科 長

レーザー治療で重症化防ぐ



視野の中心部。ここが網膜剥離を起こさないよう予防することが重要」と話している。
Ⅱ第2、4木曜日に掲載します

気。安定した母胎から急激に環境が変化し、発達途中の網膜に新たな血管が異常な増殖を始めることが原因だ。進行すると、増殖した血管が網膜を眼球の中心方向に引っ張って網膜剥離を起こし、失明する恐れもある。

県立中央病院のNICUは、県内の出生体重1500g未満の子どもたちの診療を一手に引き受ける。眼科科長の阿部圭哲医師によると、未熟児網膜症は出生時34週未満の子どもに起こりやすい。成長に伴い自然治癒するケースも少なくないが、出生体重1500g未満の小さな子どもほど重症化しやすく、治療が必要

という。治療は血管が生えていない未発達の網膜の部分にレーザーをあてて焼くことで、異常な新生血管の増殖を抑える。レーザー治療が必要な重症患者の割合も増加傾向にある。同病院に入院する出生体重1500g未満の子どものうち、レーザー治療を受けた割合は06年が3・6％だったのに対し、11年は12％。出生体重1000g未満の治療率は33・3％と、いずれも約3倍に増えた。

網膜剥離を起こさないためには、定期的な眼底検査と適切なレーザー治療が必要だ。阿部医師は「レーザーをあてた部分の視野は狭くなるが、物を見るのに一番大事なのは